

昔の中国・日本では「脳」はどのようなものと捉えられていたか：「脳」の漢字から考える

福島県立医科大学医学部 神経生理学講座 香山 雪彦

はじめに

現代に生きる私たちは、脳はさまざまな情報を処理する器官であることを知っている。そして、少なくとも脳生理学の最前線を知っている私は、その脳が「こころ」の座であり、「こころ」とは脳の働きそのものであることを知っている。例えば、前頭葉損傷によって性格が変わってしまった人の症例があることばかりでなく、ドーパミンニューロンの活動で“快”が生じること、不安・恐怖などのネガティブな感情は扁桃核が働かなければ生じないこと、そして下垂体後葉ホルモンとして知られていたオキシトシンが脳内でも働いて愛着・母性・友愛などの行動に関与していることなどが動物実験でもヒトでも示されてきていることは、脳が「こころ」の座であることを明確に示している、と私は考える。

しかし、この現代でも、たとえ脳が感覚や運動の情報を処理していることは認めても、「こころ」の座は脳とは別にあると信じている人もいる。それは世代によらず若い人たちにも、また知的能力にもよらず大学生にも、いるようである。一昔前のオカルトブームや、最近のスピリチュアルブームがそのことを如実に示している。それは洋の東西を問わず、例えばアメリカで creationism (天地創造説) が進化論よりも正しいと信じて疑わない人たちがいるのと同じ根を持つ現象なのであろう。

しかし、ごく一部かもしれないが、脳が「こころ」に関係していることを説いていた人は古代からいたようである。すでに古代ギリシャの時代の紀元前 500 年ころに Kroton (現在のイタリアに位

置する都市)にいた Alkmaion は、解剖学的な事実に基づいて脳が、「こころ」自体とは言えないとしても、知覚などに必須の構造であることを示していたという (R.W. Doty, Alkmaion's discovery that Brain creates mind: A revolution in human knowledge comparable to that of Copernicus and of Darwin. *Neuroscience* **147**: 561-568, 2007)。

それでは古代の東洋で、日本人や中国人は脳をどのようなものと捉えていたのだろうか。それを、日本最古の医学書である『医心方』、また、諸橋轍次氏が生涯をかけて編纂した『大漢和辞典』(大修館、1925年に企画され1960年に完成、全13巻)に収載されている脳の漢字や、そこに引用されている中国の文例を検証することによって考察を試みたい。

『大漢和辞典』などに収載されている脳の漢字

我々が日常使用している「脳」は近年になって作られた略字であると思われ、『大漢和辞典』にはこの字は出ていなくて、正字は「腦」である。この字を含めて『大漢和辞典』には図1に示すうち左上の字(図1-1)を除く5文字(図1-2~6)が収載されているが、「腦」以外の4文字については「腦」を見るように書かれているだけで解説や使用例は記載されていない。

このうち、図1-4の字は「腦」と同じく「腦」の略字と考えられる。これ以外にも略字はたくさんあるようで、『異体字読解字典』(山田勝美・監修、難字大鑑編集委員会・編集、柏書房、1987年)にはその略字と考えられるものを含むさまざまな漢字が挙げられている(図2)。



図1. 『大漢和辞典』(大修館書店)に収載されている「腦」の漢字(2~6)と、「腦」の項に掲載されている篆刻文字(1).

その正字である「腦」であるが、この偏(へん)は天体の月を意味するのではなく、偏の名前としては「にくづき」というように、もともとは「すじのあるやわらかい肉の象形」(『日本国語大辞典』, 小学館, 1975年)である「肉」が簡略化されたもので、体の一部を意味する。旁(つくり)は髪の毛の下に頭蓋に収められているものを意味する象形文字であると解説されていて、その成り立ちはよく理解できる。

出版社の許可を得て『大漢和辞典』の「腦」の項をコピーして図3に示すが、その最初に書かれているように、この字は古くは偏が「匕」であった(図1-2)。「匕」は匙のことであると思われるが、この匕について『説文』(中国で後漢の時代に編纂された最古の部首別漢字字典)には「相匕箸也」(匙と箸の姿である、という意味であろうか)とあり、これは図3の最後には「相つく意」と解説されているが、それでもわかりにくいので字源辞典である『新訂 字統』(白川静, 平凡社, 2004年)を調べると、「ぴったりならぶ」という意味であると書かれている。それは左右の脳半球がぴったりと並んでいるという意味だろうか。

また、『大漢和辞典』(図3)の脳髓の意味で引用



図2. 『異体字解説字典』(柏書房)の「腦」の項のコピー.

されている文例「楚子伏己, 而鹽其腦」について、『字統』には「楚子己れ(おのれ)を伏せて、その腦を鹽ふ(くらう)」と訳されていて(「鹽」の字の読みについて『大漢和辞典』を調べると、「くらう」ではなく「すする」となっているが)、いずれにしても腦を食べる習慣があったようであるから、「匕」は腦をすくって食べるための匙の意味も持っていた、という可能性も考えられなくはない。

しかし、図3の見出し文字のすぐ横に添えられた篆刻文字(図1-1)を見ると、偏は「人」のように見え、図1-2の字の偏の「匕」は「人」から転じたものとも考えられる。それについて『字統』には「人が頭(こうべ)を垂れ、それが腦の部分であることを示す」と書かれていて、非常にわかりやすい解釈であるが、それと「ぴったりならぶ」との関係がよく理解できない。

ところで、図1下の二つの字(図1-5, 6)については、現代の我々は見たことがなく、この字がどのような由来を持つものかの考察も困難である。『大漢和辞典』にもその解説は試みられていない。図3を見ると、「腦」には私たちが使っている腦と全く違った意味として「皮をなめす」という意味が挙げられていて、そこには図1-6の字への言及があることから、次のような考察が可能かもしれない(筆者の勝手な、根拠のきわめてあやふやな推察であるが)。

この字の傍の「りつとう」は刀であって、それは皮を切ることを意味し、その皮をなめすには柔らかくするだけでなく腐敗を止めなければならな

腦

29681

脳ノウ (集韻)乃老切
腦ノウ (集韻)乃到切
腦ノウ (集韻)乃到切

小 □ 脳。腦髓。なうみそ。もと
家 腦 (2-2589) に作る。〔説文〕腦、

頭髓也。从匕、匕、相匕箸也。《目象髮、
凶、象凶形。〔段注〕俗作腦。〔左氏傳〕一
十八楚子伏已、而鹽其腦。〔素問〕五藏
生成論、諸髓者、皆屬於腦。〔注〕腦、爲隨
海。〔戰國〕燕策、王腦塗地。●頭のほち。
あたま。頭骨。〔淮南子〕倣眞訓、雲臺之
高、墮者折脊碎腦。〔五代史〕雜傳、市人
爭破其腦、取其髓。●こころ。たまし
ひ。〔陸機〕與長沙顧母書、痛心拔腦、
有如孔懷。●しん。ずる。中心。〔道潛〕
和子瞻飯別詩、葵心菊腦厭甘涼。●腦
をくたく。〔張衡〕東京賦、腦方良。〔注〕綜
曰、腦、陷其頭也。〔宋書〕禮志、南腦勁
越、西髓剛戎。●或は腦 (9-29488) 割 (2
-2039) 髓 (9-29878) に作る。〔集韻〕腦、
或作腦。腦・割・髓。●なめしがは。〔廣
韻〕腦、優皮也。●つや。なめらか。〔集韻〕
腦、優澤也。●割 (9-2039) に通ず。〔周禮〕
考工記、弓人、角之未聲於割、釋文、割、本
又作腦。

図3. 『大漢和辞典』(大修館書店)の「腦」の項のコピー。あとに続く熟語の部分は省略。

いために、「止」の字が組み込まれているのではないか。また、古くは皮をなめすために動物の脂が使われていて、その脂として脳も使われていたとのことなので、この字が脳の意味にも使われるようになり、それが臓器を意味する「月」偏の字(図1-5)を生んだのではないだろうか。

「腦」と関連のない字としては『異体字読解字典』(図2)に出ているうちの左上の字もあるが、これも意味がわからない。目と心が組み込まれているのは意味がありそうだが、勿は否定を表すのだろうか。

もっとも、「目」は「月」の右下隅のハネの部分強くハネて左の縦画につながったものを書写の際に誤写したものではないかと、横佐知子さん(後述の『医心方』の翻訳者)は示唆されていて、実際、『医心方』には「腦」に限らず月偏を「目」と書いている例が多く見られるという。印刷技術が発達しておらず、古典的な書物などを書写によってコピーすることが一般的であった時代にはこのような誤写が多いのは当然であり、またこのような誤字だけでなく、増画、省画、部首の移動、その他による異字が非常に多いとのことである。

『医心方』に使われている腦の漢字

『医心方』は平安時代の984年に丹波康頼によって編纂された30巻からなる日本最古の医学書であり、中国の200以上の医学書をまとめたもので、

漢文で書かれている。その原本となった中国の医学書には本国では失われてしまっているものも多く、その意味でも歴史的に貴重なものである。天皇に献上されたものが典薬頭であった半井(なからい)家に下賜され、長く秘蔵されていたが、江戸時代に写本(安政本)が作られた(写本は仁和寺本など他にもあるようであるが、全巻そろってはいないようである)。半井家に伝わったものは国宝となっているが、その安政本を基に、現在、横佐知子氏によって40年近い歳月をかけて現代語訳が進められていて、順次出版されている(『医心方全訳精解』全30巻33冊、筑摩書房：2010年夏現在、最後の1冊の翻訳に取りかかっているという)。この考察を進めるにあたって、その横佐知子氏からさまざまな教示をいただき、またその安政本のコピーを掲載することをお許しいただいた。

横佐知子氏に教えていただいたところでは、『医心方』に使われている脳を表す漢字は2種類である。一つは図4右に掲げる『医心方』巻2「鍼灸篇」に出てくるもので、これは図1-4の字をさらに略したものと考えられる。もう一つは図4左に掲げる巻25「小兒篇」に出てくるもので、これは図1-5の字の草書体である。筆者にはこれらの漢文を読み解く能力はないが、横佐知子氏によると、いずれの漢字も頭蓋内の物質、あるいは頭蓋自体を意味していると考えられ、「こころ」の意味は持っていない。

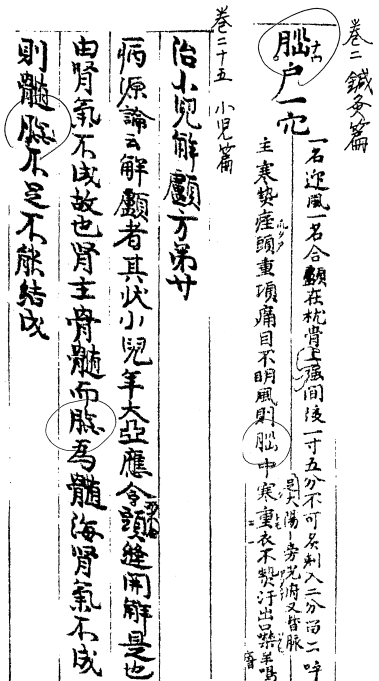


図4. 『医心方』に書かれている「脳」の字の例。横佐知子氏よりいただいた安政本のコピーをそのまま掲載する。「巻二 鍼灸篇」, 「巻二十五 小兒篇」の字は横氏の筆による。「脳」にあたる字を囲んだ丸も横氏による。

「脳」を「こころ」の座と考えたことはなかったか

古代エジプト人はミイラを作るときに全ての臓器を大切に扱っていたのに、脳は単に鼻水を作る器官と考えて（暑い砂漠の国であるから、死後に脳は簡単に融解してしまっていたのだろう）それを頭蓋底から吸い取って捨てたというから、脳を「こころ」の座とは全く考えなかったのであろう。前述のように Doty 氏によると、古代ギリシャ時代に脳を「こころ」の座と考えた人がいたが、それはその後のヨーロッパでは中世の暗黒時代を通り過ぎるまで顧みられることはなかったものと思われる。

それでは古代の中国で脳に「こころ」が宿ると考えた人はいたでしょうか。『大漢和辞典』では「脳」の3番目の意味として「こころ、たましい」が挙げられている（図3）。その文例として引用されて

いるのは呉・西晋時代の政治家・武将でありながら文学者であった陸機（261—303 A.D.）の「與長沙顧母書」（長沙にて母を顧みて与える書、という意味か）に出ている「痛心拔腦、有如孔懷」（心を痛め脳を引き抜かれ、ふところに穴のあいた如くある、という意味だろうか）で、この時代にすでに脳と「こころ」の関係に気づいていた人がいたことになる。

しかし、横佐知子氏に教えていただいたところでは、中国での「こころ」・精神についての考え方の主流は陰陽五行説に基づく哲学的な捉え方であって、脳のような実体との関係を考えることはなく、「こころ」は脳に存在するという考え方はなかったとのことである。

それはそのまま日本でも紹介されていて、例えば『医心方』の養生編には老子が『道経』で説いている「谷神不死」という考えなどが紹介されている。それは横佐知子氏の訳によると次のようなことである。

「谷（よく）とは養うということである。人がよく神（しん）を養っている場合は死なない。神というのは、五臓のそれぞれを支配する神である。すなわち、肝臓の魂（こん）、肺臓の魄（はく）、心臓の神、腎臓の精、脾臓の志（し）を指す。この五臓がすべてそこなわれれば、そこにいる五つの神は、その人の身体を去るのである。」

ちなみに、「魂」と「魄」は人の生成長育を助ける陽の気と陰の気であり、精神をつかさどるを魂、肉体をつかさどるを魄とされている。「精」はまじりけのない生命の根源にある力のことを意味しているのではないか。ここでは「神」が二重の意味に使われているが、それだけ「こころ」の中心は心臓との思いがあったのであろうか。

日本自体ではどうであっただろうか。それぞれの言葉が使われた文例を載せている『日本国語大辞典』（小学館、1975年）で「脳」を調べてみると、解剖学的な臓器としての「脳」が使われた例としては『徒然草』があげられているが、「こころ」とは言えないまでも「記憶力や判断力など、頭脳のはたらき」という意味で「脳」を使った文例としてあげられているのは、二葉亭四迷の『浮雲』と

夏目漱石の『吾輩は猫である』の中の文である。すなわち、明治に入るまでは脳に「こころ」が宿るとは全く考えられていなかったと考えられ、西洋文明が流入しだした頃からしだいに脳の働きが注目されるようになってきたのであろう。

おわりに

以上に見てきたように、歴史的に見て古い時代から脳と心の関係について気づいていた人は西洋にも東洋にもいたとしても、それは文化の中で主流の考え方にはならなかった。その文化が現代の人々の中にも色濃く流れ続けているのかもしれない。

しかし、私たちは科学の発展で人体についてもさまざまなことを明らかにしてきて、「こころ」とは脳の働きそのものであることを明確にしてきた。このことを訴えることは、脳生理学を専攻するものの責任のように感じる。

この世界は物質とエネルギーと情報で成立しており、例えば肝臓は物質を別の物質に変換する装置、筋肉はエネルギーを別の形のエネルギーに変換する装置であるように、脳は情報を変換する装置である。しかし、それは単に感覚情報を運動情報へと変換するだけでなく、脳内で記憶として蓄え、その蓄えたものと組み合わせて処理して新しいものを生むことによって、人をその人たらしめる、すなわち「こころ」を紡ぐ装置でもある。

例えば、チェルノブイリ原子力発電所の爆発(1984年)によって4万人ともいわれる死者が出た重大な事故が、現場作業員と管理者双方の重要な情報の無視と伝達のミスによって起こったことに象徴されているように、人類が滅亡するとしたら情報処理の混乱がそのきっかけになると私は考える。そのように、人の脳の情報処理がどのように行われるのかを追求する脳生理学の重要性はま

すます高まっていると考えて私は脳生理学を専攻したが、そこでは単純に脳が入力された情報をどのように処理して出力するかを追求するだけでなく、「こころ」が脳に宿ることを考えて、人格として現れる「こころ」のあり方を常に考慮に入れ、それをいかに守っていくかを考えながら研究を進めていく必要があると思っている。

謝辞

この考察は筆者の留学時代のボスである Robert W. Doty 氏 (Rochester 大学) から、「古代の東洋で脳がこころの座と考えられていたことがあったかどうか、その漢字や『医心方』などを調べて教えてほしい」と依頼を受けたことから始まった。調べてみるとなかなか面白いと感じ、ふだん考えなかったさまざまなことを勉強できたので、せっかくだからそれを Doty 氏との連名で第 30 回日本神経科学大会 (2007 年、横浜)、および第 85 回日本生理学会大会 (2008 年、東京) で発表した。日々の多忙に紛れてその学会発表のまま放置していたのであるが、2011 年 3 月で筆者は福島県立医科大学を定年退職するのを前に、形として残したく思い、この執筆を試みた。

この考察を進め、原稿をまとめるのは、『医心方』の翻訳者である榎佐知子氏にさまざまなことを教えていただいたことによって初めて可能となった。ここに改めて心からのお礼を申し上げるとともに、『医心方』を新たに我々現代の日本人の財産とすることができた 40 年にもわたるご努力に大いなる敬意を表す。

また、『大漢和辞典』のコピー掲載を認めていただいた大修館書店 (担当: 総務部 木村悦子氏)、『異体字解説字典』のコピー掲載を認めていただいた柏書房 (担当: 編集部 小代渉氏) に感謝を申し上げます。